The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	永禄九年の二つの「二十四孝」賛 : 初期狩野派「二十四孝図屏風」賛を中心に・「鏤氷集」の世界 I
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 1997, 68, p. 15-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

永禄九年の二つの「二十四孝」賛

――初期狩野派「二十四孝図屏風」賛を中心に・『鏤氷集』の世界Ⅰ――

中本大

はじめに

古筆手鑑大成（角川書店）の掉尾を飾る第十六巻、金沢市立中村記念美術館所蔵の手鑑に、所謂「二十四孝」に取材した三枚の色紙が押されている。詩形は七絶、詩題は「陸績」「伯兪」「唐夫人」で、作者はそれぞれ惟高妙安・仁如集堯・春沢永恩という室町時代末期の五山禅林を代表する三人の学僧であった。

陸　績

志与遺羹穎考齊
陶児覓栗総雲涯
擬他反哺献嘉橘
秘在幼年方寸懐

満江妙安

伯　兪

鞭笞不痛独堪悲
阿母為何筋力衰
奈此秋風人易老
請看黄落葉辞枝

乾城集堯

唐夫人

有婦乳姑真好逑
崔家弥盛百無憂
縦然成拝梳千下
昨日緑雲今白頭

枯木永恩

この色紙は、古筆手鑑大成の解説のごとく、『国華』第一〇八六号所収「大画面に見る山水構成の特例について」（昭和六十年）で、武田恒夫氏が紹介された「二十四孝図」屏風六曲一双（福岡市博物館現蔵）に貼付された色紙の十二の賛詩と同一の契機になるものである。

この屏風及び貼付の賛については、不明な点が多い。すなわち、いかなる製作契機を有するのか。依頼者は誰なのか。未発見の一双

―既にそれは完全な形で姿を現す可能性はないとしても―は元来、製作されていたのか否か。賛詩が切り取られ、古筆として賞翫されたのはなぜか。そもそもなぜ題材は「二十四孝」なのか。惟高・仁如・策彦・春沢という四人の学僧が着賛者として選ばれた理由は何か。また、それらの選択には依頼者の意志が強く働いているのであろうか―これらの疑問の中、本稿では、室町時代末期の五山禅僧の交友関係に注目しつつ、屏風の製作契機を明らかにすることを考察の中心とする。

一

武田氏の紹介された「二十四孝図」屏風の成立を考える上で、注目すべき資料の一つに京都大学付属図書館平松文庫蔵『二十四孝伝并賛』(以下、平松家本と略記)がある。既に母利司朗氏が論攷「『全相二十四孝詩選』考―日本近世における『二十四孝』享受史の諸問題―」(「東海近世」第四号・平成三年九月)の中でふれられたように、『孝行録』・『全相二十四孝詩選』と共に三種の『二十四孝賛』が合綴されており、その中の一つが「二十四孝図」屏風の着賛と一致するのである。しかもその冒頭の注記には、「聖護院門跡屏風」とあり、屏風製作の依頼者が聖護院の門跡であったことが知られるのである。

狩野派の絵師に「二十四孝図」製作を依頼した「聖護院門跡」とは誰なのか。それを考える上で、重要な示唆を与えてくれるのが、着賛者の一人、仁如集堯(一四八三〜一五七四)の別集『鏤氷集』である。

仁如は一山派の僧。禅僧としての事跡で最も重要なのは、夢窓派のみで占められてきた相国寺鹿苑院の塔主職を一山派出身として初めて勤めたことである。仁如が塔主となった永禄三年は、戦乱で焼失した相国寺が再建された年でもあり、自身は貴顕の出自でもないことから(信濃の井上氏)、その手腕が往時、如何に高く評価されていたか物語るものといえる。

一代の別集『鏤氷集』天地二冊は相国寺旧蔵。現在、原本の所在は不明。明治三十六年の謄写本が東京大学史料編纂所に収められている。そこには仁如の宗教・世俗両面の活動が文体ごとに集成されている。「鏤氷」とは、氷をちりばめることを言い、無益な労力の形容とされる。その名称から、仁如の自選と見てよいだろう。

本稿で取り上げる永禄年間前後は、同じく屏風の着賛者である策彦周良と最も親しく、『鏤氷集』にも屢々名が見える。一方、近衛家をはじめとする堂上の歌人や紹巴等の連歌師とも特に和漢聯句を通して盛んに徴逐していたことが知られる。その学識が多くの人を誘慕したであろうことは、次掲、『言継卿記』永禄七年三月十三日条の記述を以て裏付けられるだろう。

雲頂院堯長老昨日之礼に被来云々、扇杉原十帖被送之、他行之間不及面謁、無念々々

仁如は、言継をして逢着できなかったことを「無念」と言わさしめるような人物であった。

『鏤氷集』の配列は、作品に付された細かな序文や注記から判断して、文体別の編年と考えられる。その作品から読み取れる人脈や交友関係は広く、『言継卿記』と並び、戦国時代から織豊政権初期の重要史料とも見做すべきものなのである。

かかる『鏤氷集』の地集、永禄九(一五六六)年の作品の中に、

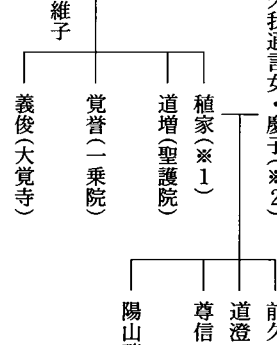
次の一群を見出すことができるのである。

二十四孝賛　惟高・策彦・春沢及予四ケ　取各六首、
自聖護院殿乞之

太后歴年多病身、君王進薬苦精神、孝心及物漢家定、　漢文帝
撫育施仁天下民
鞭笞不痛独堪悲、阿母為何筋力寒、奈此秋風人易老、　伯兪
請看黄落葉辞枝
奉母夫妻情不疎、毎供飲食問何如、天公感孝有神助、　姜詩
近舎湧泉双鯉魚
日下名高江夏黄、幼年失母自悲傷、晨昏尽孝事慈父、　黄香
扇枕温床幾暑霜
夏夜無幬夢不成、聚蚊遶鬢似雷鳴、於吾何厭桜桃重、　呉猛
為父唯思柳絮軽
到縣未曾過一旬、帰来省覲病床親、攀金滕例乞天命、　庚黔婁
香炷閑焚礼北辰

傍線部のごとく、この「二十四孝図」屏風への賛は、平松家本の注記のように、聖護院門跡の要請であったことが明らかにされたのである。ではなぜ、この永禄九年に聖護院門跡は「二十四孝図」屏風の製作を企図したのであろうか。また、なぜその賛を仁如を始めとする四学僧に依頼したのであろうか。第一、この「聖護院殿」とは誰に比定すべきであろうか。

永禄九年当時、聖護院門跡であったのは、調停のために屢々西下し、錚々たる戦国大名を仲介していた准后聖護院道増である。また、その俗姪、道澄も「新門主」として既に世に認知されていた。[1] 一例を挙げると、この二人が大島本『源氏物語』の首尾「桐壺」と「夢浮橋」を書写したのは、奥書によると永禄七年であった。さて、この二人は五摂家の筆頭、近衛家に連なる人物である。道増は永禄九年当時、「大閤」(『言継卿記』等)と称された近衛稙家の弟、一方、道澄は当主である前久の実弟であった。往時の近衛家の関係系図を次に掲げる。



※1……永禄九年七月没・恵雲院
※2……永禄三年七月没・高源院
※3……永禄七年没・夢窓派の禅僧・仁如の前任の鹿苑院塔主

稙家息で、前久・道澄の弟にあたる陽山瑞暉は策彦と同様、夢窓派の禅僧で、仁如の前任の鹿苑院塔主であった。永禄七年に没しており、その遷化を悼んだ前久の詠歌への和韻詩が『鏤氷集』にも記されている。近衛家と禅学の交友は陽山に負うところが大きかったであろう。

さて、「聖護院殿」が道増なのか、道澄であるのか。題材が「二十四孝」であることを勘案しつつ、『鏤氷集』の作品の中から探っ

てみたい。

「二十四孝」が「孝」を主題とする説話の集成である以上、その屏風の製作に依頼者の父母に対する念いの深さを忖度するのは穿った見方ではあるまい。そこで、永禄九年という年次に注目し、門跡二人のそれぞれの父母との関係を確認すると、道増の母親が永禄九年三月八日に亡くなっているのである。『言継卿記』では次のように記している。

近衛殿太閤御母儀(稙家母・尚通室)八十六才、寅刻御遠行云々

とあり、長寿を全うしたことが記されている。これを屏風製作の契機と考えることもできるであろう。

他方、道澄はどうであろうか。結論から先に述べると、今回取り上げた「二十四孝図」屏風の依頼者としては、道増よりも、この道澄の方がよりふさわしいと考えられるのである。

『鏤氷集』地集では、先に揚げた「二十四孝賛」に続き、織田信長の家臣、松井友閑の依頼によって作製された扇賛七絶四首(これは『鹿苑日録』に拠り、永禄九年六月十一日の出来事であったことが知られる)・明蔵主の依頼になる天神賛が記された後、次の七絶が収録されているのである。

今朝丁　聖門之萱堂七周忌辰、有倭歌之尊作充香供、山野陪其斎莚、綴末一字為韻、唐体一首呈之、蓋先閤亦今月初旬属纊、故末句及此、卿奉助其哀云、

慈顔如昨夢魂回、涙葉染来今七梅、秋至更添風樹恨、孝心難尽是天哉

永禄丙寅夷則下旬　此斎在二十三日

即ち、永禄九年七月二十三日に「聖門」の萱堂つまり母親の七周忌が営まれた折、門主の詠歌に応じ、仁如は末一字を韻とした絶句を呈したと言うのである。先に引用したように、道増の母は永禄九年に没しているから、ここでいう「聖門」は道澄、母は久我通言女・慶子(法名・高源院)ということになる。更に、引用の第二行に記されるように、同月の十日には道澄の父にあたる前関白稙家も他界しているのである。『言継卿記』では、

今日申刻近衛殿大閤(稙家)御他界云々

と記している。しかし、問題の「二十四孝」賛はその配列から考えて稙家他界の七月十日よりも前、更に少なくとも六月十一日以前に製作されていたものなのであった。であるならば、依頼は更にそれよりも先、「二十四孝図」屏風は、父である稙家の死を悼んで企図されたものではなく、それ以前に製作が進められていたと考えるべきであろう。そして、その契機こそ、道澄の母である稙家室の追善だったのではあるまいか。

そう結論付ける理由の一つが、賛の製作者である四人の学僧と道澄との関係である。『鏤氷集』に収録された七月二十三日の道澄母の七周忌の様子を、『鹿苑日録』同日条では次のように記す。

睡足(仁如)・賢仲(策彦)之二老到聖護院。萱堂之七年忌也。有悼之歌。睡足帰寺。不移刻。被呈和韻。哉之字也。

すなわち、仁如は、同じく賛作者として名を連ねる策彦周良と連れ立って、道澄を訪れていたのである。

それだけではない。永禄三年(一五六〇)七月二十六日に逝去した道澄の母親の葬儀が慈照寺で行われた際、仁如は秉炬の法語を認めており、その全文が『鏤氷集』天集に収められている。

高源院殿秉炬

庚申（永禄三）七月二十六日逝去、八月八日於慈照寺闍維寅刻近衛殿母儀也

……中略……

新掩妝高源院殿従二位芳岩妙誉大禅定尼

当時の慈照寺住持は道澄の弟にあたる陽山であった。その頃から陽山を通して、仁如・策彦という、文才を喧伝された禅学と聖護院新門跡との交流が深まっていったのであろう。

こうした諸事情を考慮すると、「二十四孝図」屏風は、永禄九年七月の道澄母・高源院の忌日に備えて、聖護院新門主である若き道澄によって依頼された可能性が高い、と見なし得る。

二

こうした推測は、例えば寄せられた賛詩の措辞からも裏付けられるのである。

先に引用した仁如の「伯兪」詩に用いられた措辞「秋風」「落葉」は、所謂「風樹之悲」に連なる表現である。即ち、『韓詩外伝』に見える、

樹欲静而風不止、子欲養而親不待也

に由来したもので、孝養を尽くさんと思う時に、奉養できぬこと、つまり、早世した父母への思慕を言うのである。これは一例にすぎず、賛詩の詳しい検討は別稿に譲るものの、四人の学僧、特に仁如や策彦の作品には、盟友ともいうべき道澄への愛情が随所にうかがえるのである。

聖護院新門跡道澄とその父母をめぐる禅僧との交流はこれに留まらない。実父、稙家の弔いのために法華経二十八品の和歌及び漢詩を詠出させることがあり、仁如も「方便品」を題に七言詩を詠じたことが、やはり『鏤氷集』によって知られる。この二十八品詩歌については、同じく『鏤氷集』に久我氏の代作として「信解品」（七絶）が記される他、禅学の熙春竜喜の別集『清渓稿』（続群書類従所収）に「嘱累品」（七絶）、後述のごとく策彦の『謙斎藁』に「寿量品」（七絶）、また山科言継が和歌で「薬王品」を詠進したことが『言継卿記』永禄九年八月十四日の次の記事によって知られるのである。

自聖護院新門主、先日被仰勧進之和歌可清書之由有之、御短冊給之、明日近衛恵雲院殿（稙家）五七日間被取重歟、今朝清書了、殿下（前久）御出題歟、薬王品、

この法のをしへにあはゝ誰もみな何か心のまゝになからむ

傍線部のように、和漢の詠進も道澄の依頼であったことが知られる。

仁如・策彦と聖護院、すなわち近衛家の人脈との接点はこの一例に留まらず、盛んな交流を窺うことができる。そしてそれは連歌師紹巴を核とした親密なものであったが、この詳細については稿を改めたい。

三

さて、仁如・策彦については、道澄との関係から、着賛作者として、選ばれるにふさわしい交流のあることが分かった。一方、他の作者、惟高妙安と春沢永恩はどうであろうか。

惟高は、着賛の翌年、永禄十年に遷化するまで、五山の長老として、揺るぎない地位を保っていた。例えば、策彦の別集『謙斎藁』（内閣文庫蔵）に収められた次の一文はその傍証となすに充分であろう。

永禄九寅七月恵雲院太閤昇霞、同八月十四日、受関白殿下台

命、献此頌、賜御短冊、光源院惟高大禾上御一覧、有一字慈
削
成道根従久遠通　世尊寿量付虚空　東方五百億塵劫点　都在
人々一念中

すなわち、稙家の逝去に際し、子息前久から依頼された策彦の頌詩の添削を惟高が行っているのである。なお、この七絶は「八月十四日」という期日から、前掲の『言継卿記』と同一の契機と考えられ、二十八品詩歌の一つと思われる。詩題は明示されないものの、その措辞から「如来寿量品」を詠じたものと思われる。

春沢についても既に『群書解題』で指摘されているように、策彦との交流が認められる。[2] しかも五山の長老として、南禅寺の坐公文も請けた人物であり、それ以上に、建仁寺友社に連なる学僧として、文学的に高い評価を与えられていたことは言うまでもない。その別集『枯木稿』には「二十四孝」賛以外、聖護院道澄はもちろん、近衛家との関係を直接示すものは見えない。しかし、だからこそ往時の長老、惟高を始めとし、仁如・春沢・策彦と、文才を以て世に喧伝された四人の五山僧を起用して着賛させたこの「二十四孝図」屏風には、道澄の並々ならぬ意欲が感じられるのである。

四

さて、聖護院新門跡依頼による「二十四孝図」屏風を考える上で、重要な手がかりを与えてくれた平松家本所収の「二十四孝賛」、そこには「聖護院門跡屏風」に続いて、「三好日向守請」と詩題注の付された「二十四孝賛」が並記されているのである。作者は惟高妙安・仁如集堯・策彦周良が各々八首で、道澄依頼の屏風から、春沢を除いた三人ということになる。「二十四孝」の選択も、いわゆる『全相二十四孝詩選』の別本系統、つまり「黄山谷」に替わり「伯兪」が選ばれていることも聖護院屏風賛と一致している。

近年、この平松家本について言及されたのが橋本草子氏である。『汲古』第三十号に掲載の論文「関西大学図書館所蔵手鑑『二十四孝』について」(平成八年)の中で、氏は関西大学付属図書館に所蔵される豪華な手鑑を紹介されたが、措辞の細かい異同はあるものの、関大本手鑑と「三好日向守請」の賛詩は概ね一致しているのであった。手鑑に貼付された賛が聖護院屏風や古筆切と同様、着賛者元来のものであるとするならば、二つの「二十四孝」賛はほぼ同一の経緯を以て後代に伝えられていたことが想像されるのである。そして、この「三好日向守請」とされた賛も、仁如の『鏤氷集』に収録されており、その配列から聖護院屏風と同様、永禄九年に製作されたことが知られるのである。しかし、『鏤氷集』では「二十四孝賛　惟高和尚・策彦和尚　予亦備其員各八首」と記されるだけで、それが三好日向守長逸の依頼によることは記されていない。『鏤氷集』では度々、三好釣閑斎(下野守政康)の名は見えていたが、同じく三好三人衆の長逸とのつながりも、この資料によって明らかにされたのであった。

さて、三好家にとっての永禄九年は、実は近衛家と同様、意味のある年だったのである。永禄七年に亡くなった三好長慶の葬儀が営まれたのが、この年の六月二十六日であった。葬儀は長慶の子息である左京大夫義継及び、長逸が中心となって催されたことが『鹿苑日録』の同日の記述から窺える。狩野松栄・永徳親子筆の障壁画で知られる長慶の菩提所、大徳寺塔頭聚光院の創立がこの年であるこ

とは美術史研究の上では周知であろう。おそらく仁如らの「二十四孝」賛製作の意図もこのあたりにあると考えられる。これが一つの契機となったのか、翌永禄十年の作品として『鏤氷集』に次の賛詩が見える。すなわち、「三好下野守釣閑屏風押画賛乞之、惟高策彦予各四首」として収められる、仁如の「神農・老子・太公望・杜子美」の四首である。また、同年には「右二首、三好釣閑出扇也、俄乞之、当座製之」として「扇面杜若」「扇面龍膽菊二花有之」という二首も収められている。三好三人衆の一人として、長逸とともに信長上洛以前の畿内に大きな力を誇った三好政康の強い影響力を感じさせるのである。「釣閑」政康は、永禄十一年本節用集にもその名がみえ、文化人としても顕彰すべき人物なのである。(3)

五

如上、平松家本『二十四孝伝并賛』及び、『鏤氷集』から、永禄九年に依頼された二つの二十四孝賛の製作契機について考証してきた。室町時代末期の政局に大きく関与した三好家と近衛家—近衛家と足利将軍家との関係については贅言を要すまい—の動向を考慮すると、両者の類似性が偶然の一致であったとは考えがたい。以下、この二つの「二十四孝」賛が喚起する問題をいくつか提示しておきたい。

第一に、この二つの「二十四孝賛」を収めた平松家本『二十四孝伝并賛』についてである。既に母利司朗氏が前掲論文で指摘されるように、この一書は、徳田進氏の蔵書とほぼ同一の内容をもつことが知られる。徳田氏の著書『孝子説話集の研究　中世篇』に拠ると、年次不明のものながら、書名は『孝行録附』、内容は「写本三種所収全相二十四孝詩選孝行録二十四章孝抄」と記される。金地院崇伝の旧蔵とされ、「極めて重要本・孝抄に七言詩あり」と注記される（本文三九三頁）。口絵の第九・十・十五図にその写真が掲載されており、虫喰の損傷はひどいものの、『孝行録』の古写本としても、『孝抄』という孤本を収める点からも、重要な書であることは明らかである。

さて、平松家本との関係である。平松家本は外題とは裏腹に、徳田本と同様、『孝行録』と『新刊全相二十四孝詩選』が合綴されており、更に、『新刊全相二十四孝詩選』の扉題の下に「東光寺礼松首座以唐印本写之古宿所点也」とある点までも一致している。母利氏も指摘されるように、「礼松」は不明ながら、その諱から考えて、東福寺に関連することは間違いあるまい。『鹿苑日録』に屢々見えるように、「東光寺」は東福寺内にある塔頭である。また、徳田氏が何を以て「崇伝旧蔵」とされたかも詳らかではない。或いは、『二十四孝詩選』に付された「礼松」からの類推とも考えられる。崇伝には「松首座」なる侍僧のいたことが『鹿苑日録』の記事によって知られるのである。しかし、注目すべきは、平松家本では、五山の仮名抄風の注の付された「孝抄」に替り、その七言詩の原典である「三好日向守請」の「二十四孝賛」を始めとする永禄九年に制作された二種の賛詩全作品が収められている点である。これにより、別集には収録されなかった策彦の作品があったことを始め、聖護院屏風への賛詩は、策彦のみ一詩題につき各二首が製作されていたこと、更に、別集が残されず、その結果、『翰林五鳳集』にも作品が採録されなかったため、その一代の文芸活動が不明であった惟高の作品が、一部ではあるものの、明らかにされたのは大きな発見であろう。

前掲母利氏や橋本氏の論稿でも、平松家本は平松時庸（一六五四

没）の写しとされる。時庸は、一六三三年に没した崇伝の同時代人であり、両者の間の密接な関係を伺うのに充分であろう。更に、徳田本所収『孝抄』では、既に七言詩作者の名前を記していないことに注意したい。師説を尊ぶ五山禅林の講説を伝える抄物であるとするならば、かかる所為はあり得るだろうか。この問題については次に挙げる絵巻との関係が注目される。即ち、中野幸一氏蔵絵巻「きようしゆん（堯舜）」（「奈良絵本絵巻集」10、早稲田大出版部、昭和六十三年）下巻に見える次の描写である。

さるほとに舜は姓名をかへて浦州の歴山にいたりつく……略……舜のかうかうの心さしふかかりし故に……略……かうさくのくるしきわさをたすけ給へる也。されは郭子儀がつくれる二十四かうの詩にも隊々として春にたかやす象、ふんふんとして草にくさきるとりとつゝれり。また讃のこと葉にいはく、孝心かうきゆして旻天をあふく、舜日てらすことといまにおく万ねん、てうしう耕耘すしんせいの徳、村哥つちくれをうつ歴山の田ともしるされけり。

著名な「歴山」での逸話を語る詞章で、『全相二十四孝詩選』の五言詩の引用に続いて傍線部、まさに「三好日向守請」の「二十四孝」賛所収、仁如作「大舜」詩の書き下し全文が引用されているのである。作者が記されない点が徳田本『孝抄』との共通項を感じさせるものの、その訓読は一致しない。また、「讃のこと葉」とするように、元来の製作契機も意識されているという興味深い様相を呈しているのである。おそらく近世初期、五山禅僧の学殖が人々の関心から遠のく一方で、屏風に施された賛の書跡のみが古筆として珍重されるに至る文化的志向の変化を物語っていると思われる。だとすると、「いかにも禅林抄物風の文体で記されてはいるものの、賛の作者を記さない『孝抄』よりは、平松家本のごとく賛詩原典を集成する営みが先行する」とは安易に断言できないのである。

「二十四孝図」屏風賛の利用という点では、やはり徳田進氏蔵長谷川信春筆「二十四孝」絵巻の存在も興味深い。「三好日向守請」の賛詩とほぼ一致する『孝抄』に対し、この絵巻の賛詩は、作者が表記されないものの、「聖護院門跡屏風」と一致するものが多いようである。しかし、実物を検分していないため、詳細を述べることはできない。(4)

如上、永禄九年の二つの「二十四孝」賛が、識者の興味を喚起し、一方で古筆として鑑賞され、注釈が施された上で絵巻の詞章等にも利用され、また実際絵巻にも仕立て直されていく状況を整理してみると、私的な依頼によって結実した文化的達成が、その個人的営みから飛びだし、やがて新しい基準（ここでは新たな「二十四孝賛」）として受容されていくという興味深い事象を見ることができるのである。

六

最後に、「聖護院門跡」屏風の絵師に関して卑見を述べたい。武田恒夫氏は冒頭で引用した御論攷で、「二十四孝図」屏風の成立に関し、画風を元信・松栄・永徳と比較しながら、作者を断定できないことを述べられた。その見方は、後にまとめられた著書『狩野派絵画史』（吉川弘文館・平成七年）の中でも同様である。しかし一方で、小澤弘氏など、屏風の作者を永徳と考える研究もある。(5) もちろん、稿者は美術史の専門家ではなく、美学的に作者を断定すること

などできない。しかし、屏風の依頼者が聖護院道澄であり、彼が近衛家という貴顕の出自であって、道増と並び、政治的にも重要な人物であったことを考えると、想像は広がるのである。すなわち、今谷明氏が著書『言継卿記』(そしえて、昭和五十五年)で早くに注目し、紹介された『言継卿記』永禄十年七月二十二日と十月三日の次の記事との関連である。

近衛殿へ参、聖護院殿へ渡御云々、先日燈呂之御礼進藤与三左衛門に申置了、狩野源四郎以下三人御座敷之絵書之、見物了

(永禄十年七月二十二日)

……前略……次近衛殿へ参、御見参御盃賜之、狩野源四郎御座敷絵書之、暫見物、御雑談了　(永禄十年十月三日)

既に指摘されているように、狩野源四郎は永徳である。永禄九年の翌年、大徳寺聚光院の障壁画という大仕事をやり遂げた永徳は、次いで近衛家の襖絵製作に着手したのである。三好家と近衛家と永徳を並べた時、そこに永禄九年の二つの「二十四孝」賛を結びつけることは強引であろうか。「二十四孝図」屏風が「少々の破綻をかえりみず、積極果敢に古くからの形式を崩そうとしている意欲が看取される」(武田恒夫氏『狩野派絵画史』第一章)作品であること、五山の学僧への着賛の依頼、そして依頼者が、後には豊臣秀吉の帰依もうける、三井長吏大僧正という高僧であったことを考える時、その屏風の作者は松栄・永徳こそがふさわしいのではあるまいか。(6)

おわりに

興味深い二つの「二十四孝」賛である。同じ永禄九年の製作であること、作者が共通することだけでなく、平松家本では並べて収録されたように、競合すべきものとして捉えられていたことは間違いあるまい。重要なのは近衛家・三好家・聖護院門跡・狩野松栄永徳という関係する人物の多様さだけではない。多彩な人物の中にあって、五山禅僧が重要な役割を果たしていることは忘れてはならない。もちろん着賛に際しての禅僧個々の意識は明確ではない。基本的には個人的な交流が生み出したものであったろう。しかしそれが、結果的に文学と絵画を融合させ、絵巻などへも援用されるという、次世代への新しい息吹を作り出していくのである。仁如の次代の泰斗、五山を離れた林羅山は「二十四孝」が選ばれた原因を、六曲一双屏風に求めたという。(7) 羅山の時代既に「二十四孝」が屏風とは切り離せない存在になっていたのである。そうした認識を羅山に植え付けたのが仁如・策彦ら、永禄・元亀・天正期に活躍した五山の学僧であった。この永禄九年の二つの「二十四孝」賛とその受容の様相は歴史ある五山文壇最末期の一つの象徴であったと言い得るのである。

注

(1) 聖護院道増及び道澄については、以下の先行研究がある。
粟野秀穂「聖護院門跡道増・道澄について」(「史蹟と古美術」第十五巻第三号・昭和十年九月)
田坂憲二「大島本源氏物語をめぐって」(「香椎潟」第三十三号・昭和六十二年九月)
また、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究　室町後期』(明治書院)には、道増・道澄を始め、往時の堂上歌人について多くの学恩を蒙った。併せて参照されたい。

(2) 『枯木稾』(『続群書類従文筆部』)解題

(3) 米谷隆史氏「新刊節用集大全の編纂資料をめぐって」(「国語学」第百八十八集・平成九年)参照。なお、永禄十一年本『節用集』巻末の「二

十四孝」は大変興味深い。『国花集』や『節用集大全』等に所収の「二十四孝」が明代の叢書『群書拾唾』に拠るのとは異なり、『全相二十四孝詩選』と比較すると、王祥が重複して採られる他、「黄山谷・唐夫人・王哀・庾黔婁・二張」に替わり、「曾参・康姜・李密・伯兪」が採られている。これと一致する「二十四孝」は現在見出されない。また、（4）に示した徳田氏の論攷の注記で、永禄十一年本と密接な関係を持つ天正十七年本『節用集』に「二十四孝」名が記されていることへの言及がある。

（4）徳田和夫氏の論攷「二十四孝」誕生前夜」（『お伽草子研究』・昭和六十三年・三弥井書店）の注で言及されている。

（5）月刊アーティストジャパン第十二号「狩野永徳」（同朋舎出版・平成四年）

（6）聖護院には狩野松栄筆の「花鳥図」屏風六曲一双が襲蔵されている（大阪市立美術館寄託）。この屏風については土居次義氏の論攷「聖護院の水墨屏風と狩野松栄」（『日本美術工芸』八―五六三・昭和六十年）がある。

（7）徳田進氏『孝子説話集の研究　中世篇』第二章第四に指摘がある。「続日本儒林叢書」所収『儒門思問録』巻第一下に、「六曲屏風一双ニ図賛ヲ二ツヅツ一曲ニ張リケル故ニ、二十四ヲ撰ブナルベシ」とある。

※『言継卿記』は国書刊行会、『鹿苑日録』は続群書類従完成会刊行の活字本に拠った。

本稿は平成八年度文部省科学研究費補助金「室町時代後末期の五山禅林文壇の研究」（奨励研究A）による成果の一部である。

――本学助手――